

# NEWSLETTER of The Japanese Society for Applied Animal Behaviour

No. 17, August 2009

## ◇ISAE Council Meeting (2009 Cairns)報告

近藤 誠司

応用動物行動学会 会長

(北海道大学北方圏フィールド科学センター 教授)

2009年7月6日から7月10日まで、オーストラリア北部の町ケアンズ（Cairns）で第43回国際応用行動学会議（ISAE2009Cairns、以下ISAE学会）が開催された。ISAE学会のレジスタレーション日である6日に、恒例によりISAE



カンガルーを仕留めた近藤会長

Council Meeting（理事会）が、会場の Cairns Convention Center で開催された。近藤は東アジア地区理事（Regional Secretary）として、この会議に出席した。日本を出発したのは7月5日夜8時過ぎのジェット・スターという航空会社（大手との共同運行便）で、6日の朝5:30にケアンズ空港に到着した。なお、この便には日本からのISAE学会参加者の大半が乗り込んでおり、出発前に成田空港レストランで有志が集まり、壮行会もどきも開催したりして和気藹々としたおよそ8時間の空路であった。私自身は昨年と同様、応用動物行動学会が管理する基金の補助を受けたもので、ほかにも同基金から補助を受けた麻布大学大学院の小山・加瀬両会員、茨城大学教員の小針会員など3名も同じ便でケアンズ入りした。

私と酪農大学の森田会員夫妻は氏が見つめてきた、期間中のホテル代まで組み込まれた格安ツアーで参加していたので、空港にはツアー会社の出迎えがあり、市内のツアーセンターに送り届けてもらった。ただし、この便は出発日に向けてどんどんチケット代はダンピングされて、最後は札幌-東京の運賃よりも安くなっていたとも聞いた。他の参加者はそれぞれお安いチケットを探したらしい。

ツアーセンターで各種説明を受けた後、私は各種オプション・ツアーや市内見物に出発する観光客を横目で見ながら、会場へ向かった。そこから宿泊するホテルまでは5分、ISAE

会場の上記 Convention Center まで歩いて 10 分ほどの距離であった。会場の外でタバコを 2 本ほど吸って、夕方まで延々と続く（英語の！）会議への覚悟を決めたのであった。

当日理事会の出席者は Janice Swanson 女史はじめ、各役員、地区理事など 10 名であったが、別に本理事会に出席できなかった委員がウェブで参加した。なお、例年であれば Elsevier 社からエージェントが出席し、ISAE の公式雑誌である Applied Animal Behaviour Science に関する報告があるが、この会議ではなかった。恒例の Applied Animal Behaviour Science の Editors meeting もキャンセルとなっていた。Elsevier 社としてはオランダから豪州までは遠すぎたのだろう。

会議は Swanson 会長の開会の挨拶に引き続き、出席者の確認と欠席者のお詫びがあり、ついで前回のメール会議（2009 年 2 月および 5 月）での議事録の確認があった。これらに加えて、全部で 17 項目の議題が用意されていた（閉会の辞もいれれば 18 項目）。内容をかいつまんで紹介する。

まず、Junior Vice-President の Vicky Sandilands 女史（地区担当）から各地区からのレポートについて紹介があり、ついで本東アジア地区理事の交代が審議された。既に NL などでお知らせしているように、ISAE の東アジア地区支部会でもある私ども応用動物行動学会では、私近藤に変わり麻布大学の植竹勝治教授を地区理事として推薦していたが、ここで正式に認められた。なお、この審議に当たり会長の Janice Swanson 女史から現在までの私ども日本の応用動物行動学会が ISAE に多大な貢献をしたことをたたえるスピーチと私に対する謝意が述べられ、大変面はゆい思いをした。

ついで、会計報告となったが、これは Jeremy Marchant-Forde 氏がウェブ参加で行われた。ISAE2008 年 9 月段階の締めで、収入総計が 22,723.73 ユーロ、総支出は 15,307.50 ユーロで、総 General Fund として 42,792.60 ユーロがあることが報告された。

ついで Hans Spoolder 氏から会員登録関係の報告があった。現時点で 2009/2008 の会費を払った会員が 473、2008 の会費までしか払ってない会員が 156、会費免除会員が 2 名と名誉会員が 10 名となっている。会費免除会員はインドのパル氏とブルガリア人で、パル氏については今度の学会もファンドに応募したとのこと。2005 年の ISAE 日本以来、パル氏はファンド獲得者の常連である。なお 2007 年から会費を払っていない会員が 22 カ国に渡っているとのこと、心当たりのある方は可及的速やかに払われたい。また ISAE の会員登録ほかの管理を依頼していた Mike Hooper 氏の問題が話し合われた。氏の名前は会計報告や他にも何度も出てきている。とにかく、ウェブ構築がさっぱりうまくいかないばかりか本人と連絡も取れず理事会は困惑している状態にあったが、今後契約の破棄も含めて解決する模様。ウェブのスパムフィルターをきちんとするとの提案もあった。

Communication Officer の Keelin O' Driscoll からウェブページの更新とウェブでの払い込みについて報告があった。会費支払いのウェブシステムが不調で、この学会までには回復していると報告された。これに関してもまた Mike Hooper 氏の問題が話題に上った。

今回の学会について Procedural Advisor の Carol Petherick 女史から報告があり、発表者のアブストラクトは全部で 205 編とのこと。ポスター会場では、Vicky 女史らが会員登録テーブルに陣取って、新たな会員獲得に努めることとなった。オーストラリア・NZ・アフリカ地区についてのコメントがあり、今後も世界的な発展を目指しての戦略を練るべきではといった論議がなされた。

チェコの Marek Spinka 氏はこの会議には欠席であったが、Senior Vice President としての報告・審議はウェブで双方向同時会話でおこなった。第 44 回（2010 年）は既にお知らせしたように Sweden の Uppsala で 8 月 3ー7 日に開催される。実行委員会の Lena Lidfors 女史が理事会に出席して会場や日程など説明した。この学会のウェブは既に設けられており、各自参照されたい([www.isaesweden2010.se](http://www.isaesweden2010.se))。その後第 45 回(2011 年)は米国の Indianapolis で、Purdue 大学が主催して開催されることが報告された。ついで、第 46 回（2012 年）はオーストリアのウィーンで開催予定。また 2016 年の本 ISAE 学会 50 周年記念大会は英国 Edinburgh で行われるが、2013 から 2015 年の開催地については未だ決定していないのが現状である

Bas Rodenburg 氏は Assistant Secretary として ISAE のガイドラインの変更などを報告したほかヨーロッパ理事会での ISAE Expert の選出を依頼した、ISAE 理事会として Vicky と Kittle 女史の名前が挙がった。この二人は 16 番目の議題である AOB(Any other business)で出てきた OIE の Animal Welfare 関連の連絡担当者となることにもなっている。以上の他、Editor の報告（代理で Anna Vairros 女史）、Education Officer 報告（Maria Anderson 女史）、Ethics Officer 報告（Stine Christiansen 女史）がなされたが、特別な事項はなかった。

この学会で何人かの役員の任期が終了する。それについて 15 番目の議題として、Secretary の Anna Vairros 女史からあげられた。今回新たに選出すべき役員は、Junior Vice-President(2009-2011), Secretary(2009-2013), Treasurer(2009-2013), Junior Editor(2009-2011)で、それぞれ Anna Vairros 女史、Chariotte Stewart 女史、Ngairo Beausoleil 女史がここで選出され、最終日の総会でも承認された。なお会長（President）は昨年の総会で Vicky Sandilands 女史が選ばれており、それまでの会長であった Janis Swanson 女史が自動的に Senior Vice President となっている。全役員構成については ISAE の公式ウェブを参照されたい。

ISAE の認定学術雑誌である Applied Animal Behaviour Science（以下 AABS）の編集部からの

報告は無かったが資料が配付されており、現時点のリジェクト率は57%あまり、掲載論文の国別分布では西ヨーロッパが52%と半分を占め、ついで米国・カナダが23%と1/4、その次はアジアが12%を占めている。インパクトファクターは1.823で、最も高いJ. Dairy Scienceの2.486から数えて7番目である。昨年は36番目の位置づけであったので、急上昇している。応用動物行動学会の会員諸氏も張り切って投稿されたい。

長々と続いた私にとっては最後の理事会も18時前には無事終了し、ついで18:30からConvention Centreのバルコニーでウエルカムパーティが開催された。豪州先住民民族アボリジニの人びとの音楽や動物のまね（これがなかなか良く特徴を捉えていて感心した）が演じられ、楽しめたウエルカムパーティであった。

ケアンズは熱帯雨林に属しているが、南半球はちょうど冬で、私どもには札幌のような過ごしやすい夏、といった感じの気候であった。会期中のバンケットには、応用動物行動学会から補助を受けた小山・加瀬両会員が浴衣姿を披露したが、気候に良くマッチしており、会場でも評判を呼んだ。

世界中に猛威をふるっているインフルエンザがちょうどオーストラリア南部でも流行しており心配されたが、ケアンズでは全く別の国の話という感じであった。主催者側は総会でも、このインフルエンザ流行を非常に心配していたが無事開催できてほっとしたと述べていた。我が国からの参加者では東北大学の佐藤先生など3名がキャンセルした。理事会などで日本側の反応を聞かれたりしたが、いわゆる季節性のインフルエンザというとならえ方になっていると説明した。ただし、キャンセルしたDr.Satoとそのグループは、所属する家畜福祉学講座が我が国でも珍しいくらいの僻地・山間部の村にあり、もし彼らがこの学会に参加して帰国した後、村にインフルエンザが発生したりしたら、村人は佐藤先生以下を「生きながら火あぶりに処するであろう」と説明しておいた。この説明に実行委員会委員ほかすべての人が深く頷き納得した。

昨年の学会時にケアンズのISAE委員会から小さなコアラ人形が配られ、この学会参加者はこれをもってCairnsに来ることが期待されていることをニュースレターにも書いた。最終日の総会では抽選が行われ、おみやげのコアラ人形の下部の番号と色により、賞品が与えられた。私はその人形を知り合いの子供にやっと思い、ほぞをかんだ次第である。

この学会に参加した日本人の会員は暇を見つけて海辺に繰り出していたようで、なかなか過激な海水浴客の形態と行動観察に励んでいたようであったが、私自身は学会で企画されたエクスカージョンでクロコダイル公園にいき、体長4mのワニがジャンプするところをみて感激するばかりであった。

## ◇ 第 43 回国際応用動物行動学会(ISAE)参加報告



左から) 小山、Alma P Rosas Trigueros さん、加瀬

小山 奈穂

(麻布大学大学院獣医学研究科 博士課程 1 年)

応用動物行動学会から助成金を受け、第 43 回国際応用動物行動学会に参加した。私にとっては初めての国際学会への参加であった。本学会は 2009 年 7 月 6 日から 10 日までの 5 日間、オーストラリアのケアンズにある Cairns Convention Centre にて開催された。ケアンズは大陸の北西に位置するため気温は日本の 7 月とあまり変わらなかったが、空気は乾いており日中はよく晴れて気持ちの良い毎日であった。

本学会はまず Wood-Gush Memorial Lecture から始まり、L. Rogers 氏によって脳と行動の側性化と動物福祉との関連性について述べられた。その後続いた口頭発表は Animal Emotion and Cognition、Welfare Assessment and Enhancement、Management of Unwanted Animals、Animal-Human Interactions および Animals in Extensive and Natural Environments の 5 つのテーマに分けて行なわれた。

発表内容は全体的に家畜やコンパニオンアニマルを対象にした研究が多くを占めており、動物園動物についてはほとんどなかったため対象動物にこだわらず、飼育環境の福祉評価や動物とヒトの社会関係などのテーマを中心に回った。興味深かったのは C. O' Connor 氏が唱えた科学的裏付けを基盤とした政策を立てることで動物福祉に促進につながるという考え方で、欧米に比べ発展が遅れがちである日本の動物園にとっても取り入れるべき視点であると感じた。

一方、ポスター発表の時間は午前と午後の休憩時間にあわせて設けられており、毎回お茶やフルーツ、クッキーなどが用意されリラックスした雰囲気で行なわれた。ポスターは全部で 65 題あり、そのうち動物園動物に関する研究は私を含め 4 題のみであった。

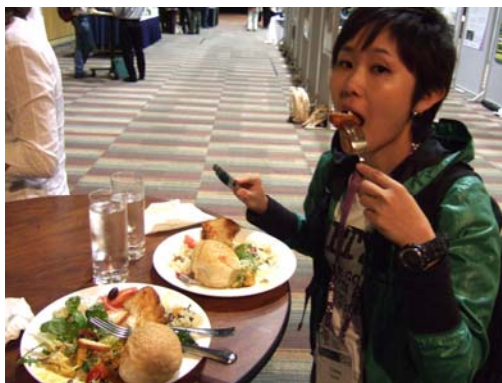
その中で、タロンガ動物園の行動生態学者である M. Hawkins 氏とお話する機会を得ることができた。彼女は、Night Zoo で展示時間を延長することが動物のストレスになるとは考えにくく、寝室に收容する場合より活動的になったと報告していた。また調査前に行動レパートリーの変化について仮説を立てていたことから、飼育管理方法や飼育環境を部分的または全体的に変更・改良する場合、動物に与える影響をある程度予測できることが必要であることも示していた。彼女のような動物園に所属する行動学者の方と交流できたのは国

際学会だからこそと思うが、動物園動物の福祉研究を行なううえで動物園と研究機関との連結は今や世界では一般常識となっていることも実感できた。

また、私のポスターに関しては、飼育下のリンクスについて同じように分娩・母子行動を調査した研究者や、ブタの飼育環境評価について研究している方など数名の方が、行動の変化について詳細に調査している部分を評価してくれた。質問やコメントが投げかけられたときは、自分の研究に関心を示してくれたことに嬉しく思う反面、英語能力の向上を決意した瞬間でもあった。しかし、写真にもあるように学会で知り合って仲良くなった方がおり、食事をしたり Cairns Tropical Zoo の Night Zoo ツアーに参加するなど、大変充実した日々を送ることができた。

今回 ISAE2009 に参加し、様々な国の方々の発表を見聞きできたことで、動物行動学の可能性は自分が想像していたより幅広く、やはり面白い学問であることを再確認できたと同時に、普段の研究生活の中で狭くなりつつあった視野がひとつ開けた気がした。このような貴重な機会を与えてくださった、応用動物行動学会の近藤誠司会長ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

## ◇ 第 43 回国際応用動物行動学会(ISAE)参加報告



加瀬 ちひろ

(麻布大学大学院獣医学研究科 博士課程 1 年)

7 月 7 日から 10 日まで、オーストラリアのケアンズで開催された第 43 回国際応用動物行動学会に参加した。日本からは 10 名程が出席し、学生は私を含め 2 名が参加した。今回が私にとっては初めての国際学会であり、初めてのポスター発表であった。発表は分野を問わず満遍なくまわったが、ここでは主に私が研究の対象としている野生動物の分野について報告する。

発表全体の研究分野は、やはり家畜の福祉を内容としたものが多く、野生動物については全体の 9 分の 1 程度であった。今回、野生動物の分野で発表された内容には、野生動物の管理においても、家畜や動物園動物のように動物福祉に配慮すべきであるという意見が多く盛り込まれていたが、福祉的であると評価された手法に疑問を感じる点もあった。

Bidda Jones 氏は、オーストラリアで個体数が増加しているカンガルーやオウムなどの動物、「unwanted animal」の個体数管理の現状と、毒餌を使った個体数調整について、経費、

有効性、標的動物への特異性や実用性だけでなく福祉的にも評価が高い手法として紹介した。Charles T Eason 氏は、これまでに毒餌に用いられていた 1080 や Brodifacoum は、摂食後、死に至るまでに数日を要する場合もあり、その間動物には苦痛が伴うことから、福祉的ではないという問題点を指摘した。そこで、摂食後、死に至るまでの時間が短い Para-aminopropiophenone (PAPP) の使用を推奨した。このように、致死的な方法で野生動物の個体数を調整している一方で、非致死的な方法でオーストラリアの固有種であるカンガルーの個体数を減少させる試みも行われている。Chris Mayberry 氏は、ハイイロカンガルーの雌個体に生殖機能の抑制効果がある Deslorelin を投与し、繁殖制御の効果を得た研究を報告していた。

これらの研究は、日本での野生動物による被害防除対策とは視点が異なっており、大きな衝撃を受けた。これまでは日本においても、鳥獣害対策として主に個体数調整が行われる傾向にあり、現在でも個体数調整にのみ頼っている地域もある。しかし、現在の日本における鳥獣害対策の考え方は、人間が野生動物を里に引き寄せ、個体数を増やしているという現実を、いかに客観的にとらえられるか、というところから始まる。無意識に野生動物に餌付けをし、人慣れさせてしまった結果、人間と野生動物の間にある心理的な壁が消失し、鳥獣害問題が拡大、深刻化している。被害防除方法には、農作物被害であれば農地を柵で囲うなどの方法があるが、第一に野生動物への無意識の餌付けをやめ、人慣れさせないことが提唱されている。国により規模やシステムが異なることから、日本で提唱されている方法をオーストラリアで用いるとは不可能である。しかし、なぜ問題になるほどカンガルーやオウムの個体数が増加しているのか、その要因を振り返る価値はあるだろう。Pete J Goddard 氏は、人間が野生動物に与えている影響は甚大であることから、野生動物の管理をする責任につて主張していた。野生動物の管理とは個体数調整だけを示すものではない。今後は個体数調整とは異なる視点で、野生動物の管理について議論されることを期待したい。

私のポスター発表の内容は、ハクビシンの家屋侵入被害を防除するための基礎的知見を得るために、侵入可能な入口の形状と大きさを検討するものであり、何人かの方が見てくださった。Chris Mayberry 氏も見てくださり、コメントを頂いたが、私の拙い英語では活発な議論に発展せず、非常に残念であった。日本国内だけではなく、野生動物問題に関する考え方について、様々な意見交換をするため、英語での会話力を身につける必要性を改めて感じた。

最後になるが、国際応用動物行動学会には日本での学会と比にならない程、女性の参加者が多いことに驚いた。女性の占める割合は、学生だけでなく研究者や大学の先生方にも



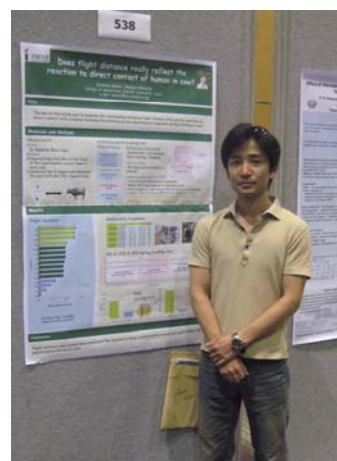
多かった。また、どの方もパワフルで、同じ女性として非常に勇気付けられた。今回の学会で得られたものは、知識的、概念的そして精神的にも多かったと感じる。応用動物行動学会からの助成を受け、本学会に参加する機会を与えてくださったことに、深く感謝致します。

## ◇ 第 43 回国際応用動物行動学会(ISAE)参加報告

小針 大助

(茨城大学農学部 講師)

2009年7月6日から10日にかけて、オーストラリア、ケアンズにおいて開催された第43回国際応用動物行動学会(以下ISAE)に参加した。時差がほとんどなく、距離も例年欧州を中心に開催される大会よりも短いこともあり、移動での疲労が少なかった。また、現地は時期的に冬に当たったが、熱帯でしかも乾期であったことから、気候的にも欧州開催とほとんど変わりなく、非常に快適であった。



大会は①Emotion and Cognition, ②Welfare Assessment and Enhancement, ③Management of Unwanted Animals, ④Animals in Extensive and Natural Environment, ⑤Free communications の5つのテーマで構成されていたが、主として①と②の話題が多く、私としては前回ダブリン大会よりも興味深い内容の発表が多かった。特に初日の Plenary に行われた Rogers のストレスや社会的認知に関する偏側性の話題やその関連研究は、大脳半球別の役割と認知反応に関するもので、恐怖伝達とストレス感受性との関係で、ちょうど学生に関連した研究を行わせていることもあり、研究欲をかき立てられる内容であった。彼女らは20年前から Laterality に関する研究を進めており、論文も多数発表されているが、プレゼンテーションの内容も非常にわかりやすく、講義や講演をする際の参考にもなった。Welfare Assessment の発表は、ウシやブタに関するものが、それぞれ15題、12題と多く、ニワトリ(ターキーを含む)5題、ヒツジ4題、その他10題となっていた。その中に Welfare Quality の関連研究で、昨年ベルギーで開催された WAFL で情報交換をしたスペインの学生の発表もあった。彼女らの研究は WQ 基準の Feeding, Housing, Health, Behaviour の4基準、11項目についてスペインとフランスの養豚農家に適用したもので、舎飼・放牧といった管理方法の違いにより、農家間差が出やすい査定項目があるといったような内容であった。また、泥浴などが出現する(実行できる)環境をポジティブと捉えるかネガティブに捉えるかなど、判断が難しい項



目もあり、いくつかの項目についての追加研究の必要性なども指摘していた。WQの最終会議は今年10月にスウェーデンで開催されるが、参加される学会員がいらっしゃれば、是非その様子についてもニュースレターで報告いただきたい。

その他、ポスターは62題と例年より少なめであったが(しかもポスター会場が非常に広く、なんとなく閑散としていた)、家畜だけでなく展示動物やコンパニオアニマル、またご当地のカンガルーの管理といった Wildlife management に関する発表もあり、応用動物行動学ならではの発表演題の豊富さであった。

今回は ISAE 派遣助成の再公募から、教員ながら学会の助成を戴き、参加することができた。若手研究者にとって、海外における最新の研究情報を得られる機会として国際学会の参加は非常に貴重であり、本助成には非常に感謝している。次年度以降も ISAE 参加助成の募集があるかと思うが、若手研究者・学生には、見識を広める上で貴重な機会であるので、是非積極的に応募していただきたい (paper の obligation はあるが…)

最後に、会期中なぜか何度も通ったステーキハウスの T-bone ステーキは 300g もあったが、あっさりしていてペロッと食べられた(後日 500g 食べられた方もいたらしいが…)。ステーキなれど日本とは全く異なる料理の質に、その土地で作られたものはその土地の人々が最も美味しい食べ方を知っており、実際最も美味しく食べられるという、食文化の基本について考えさせられた学会でもあった。

## ◇ 編集後記



ISAE から帰国直後は蒸し暑い日が続いておりましたが、最近では冷夏のうわさも飛び交うほど涼しい日が続いており、作物の生育が心配なところですが、皆様のところではいかがでしょうか。今回のニュースレターNo.17では、オーストラリア・ケアンズで行われた ISAE の参加報告を中心にお届けしました。9月には沖縄・与那国でシンポジウムが開催されます。次号ではシンポジウムの報告も含めて10月頃に配信できるようにしたいと思います。会員の皆様からのニュースレター掲載希望情報も随時募集しておりますので、配信希望がございましたら、お気軽にご連絡ください。(ニュースレター担当 小針 大助：[kohari@mx.ibaraki.ac.jp](mailto:kohari@mx.ibaraki.ac.jp))